

1

私立学校における新しい学力観と評価の在り方

山路 進（日本私学教育研究所 主任研究員）

1. 本研究の目的と内容

新しい学力観に対応することや、評価を通じて学習指導の在り方を見直し学習指導の改善をはかること（学習と評価の一体化）が重要視されている。

中央教育審議会・教育課程部会の報告（小・中学校の児童生徒の学習評価の在り方について 2010年3月）では、「観点別学習状況の評価が定着していることから、高等学校段階においても、学習評価の前提となる指導と評価の計画や、観点に対応した生徒一人一人の学習状況を生徒や保護者に適切に伝えていく等、学習評価の一層の改善が求められる。」と記され、次の学習指導要領改訂を想定し高等学校の評価についても、新しい評価方法の導入も検討されている。

本研究では、学習評価の妥当性や信頼性を高めるため、これまでの評価の考え方、目標に準拠した評価および観点別学習状況評価など、評価の基本的な考え方および評価方法について考察した。¹⁾

2. 評価の基本的考え方

学習指導において、評価の役割、何を評価するのかについて考えると、1つは、「学習者の理解力・能力」を評価することであり、もう1つは、「指導法を評価」することである。

何を評価するのか
・学習者の理解力・能力評価
・指導法の評価

すなわち、学習者側の評価だけではなく、教える側の評価を含んでいるし、さらに「評価の仕方を評価」することも含む。また、評価の機能として重要なのは、「学習者の動機づけに効果をもたらす」ことである。単に、テスト結果だけを与えるのではなく、学習者が課題に取り組んだプロセスを個別にしっかりと見ること、教師から学習者へのコミュニケーションの役割を果たし、成果が結果に表れることなど、それが立派な動機づけとなっているからである。つまり、学習者に対する個

別の対応であり、「評価」を学習者の KR 情報²⁾として提供することが、学習の動機付けとして役立つのである。

2.1 学習指導の評価

このように教育評価の主要な目的は、学習者側にとっては自らの学習を改善すること、そして、教える側にとっては教育システムを改善することと言える。教育活動の進行に沿って考えると、一般的には、学習者への評価は次のような3種類の区分が考えられる。

第1は、事前的評価（診断的評価）と呼ばれるもので、ある教育プログラムの始まる前に、学習者がどのような知識・技能を身につけ、学習をどのように評価するのか、或いはしているかを評価するものである。第2に、教育プログラムが実施されている途中において、学習者がどの程度目標を達成しているかを把握し、指導に生かすための評価であり、形成的評価と呼ばれる。第3に、教育プログラムが一段落した時点で、全体的な成果を評価するもので、総括的評価と呼ばれる。

定期テストや通知票などの総括的評価が、一般的には評価の典型と見なされがちであるが、学習の改善という意味では、事前的評価や形成的評価が重要である。とりわけ形成的評価は、教育目標と現在の学習者の達成とを照らし合わせて、教育を軌道修正していくものであるから、教授・学習過程において中核的な役割を果たすものと考えなくてはならない。

3. 評価の方法

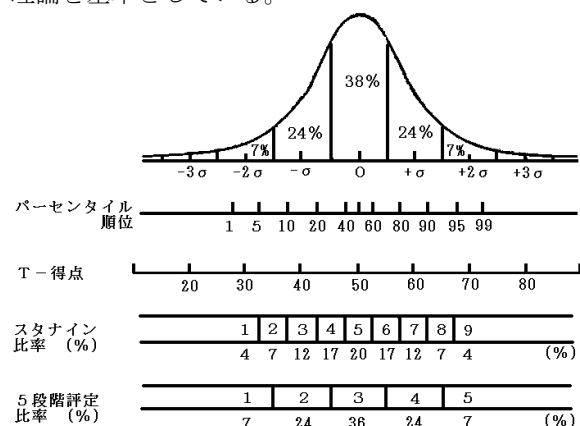
これまでは相対評価を基本として、指導要領や通知票等では評価をしてきた。評価には、教師が設定している一定レベルにまで生徒が成長したかどうかで判定する考え方の一つとして、目標に到達（達成）したかどうかで判定をするという考え方がある（目標に準拠した評価、到達度評価・達

成度評価)。すなわち、予め設定した学習目標の達成基準を用意してから学習活動を行い、その目標基準に照らし合わせて達成の度合いを評価するものである。また、1つの方向性だけではなく、多面的に学習者を評価する観点別評価（「知識・理解」、「技能」、「思考・判断・表現」、「関心・意欲・態度」）の4観点による評価も重要な評価法である。

これらの考え方を反映し、1980年(昭和55年3月)指導要録改善協力者会議において、「相対評価から絶対評価へ」の方向性が示された。現在では小学校、中学校の指導要録や通知表等は、目標に準拠した評価・観点別学習状況評価によって評価している。

3.1 相対評価

相対評価は、他の児童生徒との比較を通して資料を解釈する評価であり、集団（規準）準拠評価（norm-referenced assessment）とも呼ばれる。「集団の絶対数が多くなればなるほど、その成績の分布はおよそ正規分布³⁾に近づく」という統計学の理論を基本としている。



しかし、実際の学力試験ではその成績分布が正規分布にならないことが多いことはよく知られており、上記の基本的な考え方は実態にそぐわない場合もある。

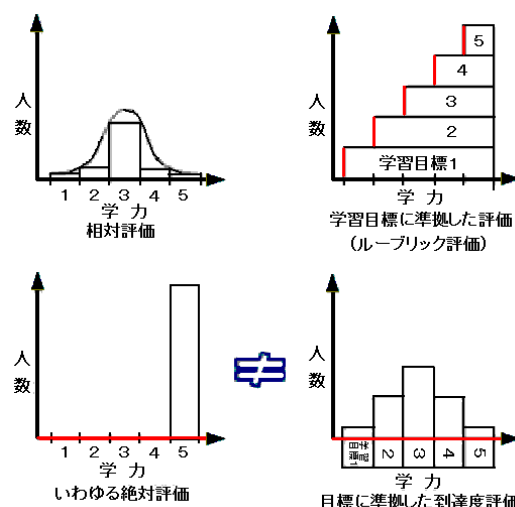
3.2 目標に準拠した評価

目標に準拠した到達度評価（いわゆる絶対評価）
到達度評価とは、「外的に設定された目標に照らして当人の姿や成績を位置付けし評価する」である。絶対評価という「絶対」とは、一つは「外的に設定された目標や到達基準」であり、もう一つは「評価者が持つ内的基準」の絶対性を意味している。ただし、教育データ（測定値）は、定量的なものから定性的なものまで様々であり、尺度水準でいうところの比例尺度（ratio scale）ではないことに注意が必要である。

3.2.1 目標に準拠した評価のしくみ

目標に準拠した評価では具体的に「何」が「どの程度」到達されているのかを問題にする。つまり、学力のどのような側面が個々の学習者に形成されているのか、また、形成されている程度はどのくらいかを判断することが目標に準拠した評価の目的である。

したがって、目標に準拠した評価を行うには「何」に該当する学習目標と、「どの程度」、すなわち、到達度を判定するための到達基準をあらかじめ設定する必要がある。



学習目標は、評価の観点となる各目標領域（たとえば、知識領域、技能領域など）に対応して設定されるもので、主に行動目標（「～ができる」「～が言える」など）として具体的に表現される。この教育目標（到達目標）は、学習内容との関係で設定される質的な概念であると言える。

これに対して、到達基準は、各学習目標について、どの程度達成したかを判断する「物差し」のことであり、量的な概念である。

具体化された行動目標という質的基準に基づいて行動目標領域を代表するテスト項目を選んで多数の問題を作り、それを実施して得た採点データから、何点以上は到達・達成、何点以下は未到達・未達成という尺度、すなわち、基準設定（Criterion）に対する量的な標準：standard の設定）を行うことになる。

この到達度は、例えば、正答率などによって表現される場合もあるが、一般的には、「到達しているー到達していない」の2段階や「十分到達ーおおむね到達ー到達が不十分」の3段階などの到達段階で示されることが多い。

目標について整理すると、「その学習指導を受け

ることによって、学習者は、新しく～ができるようになる」これが学習目標である。ここで「～ができるようになる」と「行動のことば」で示すものを行動目標と言う。行動目標とは、外見的に観察可能な学習者の行動として記述した授業の目標である。

行動目標 授業の中で扱う形成的評価の目標

〇×を理解する

「理解する」は学習者の頭の中で完結する動詞であり、行動を伴わないものです。

〇〇を△△できる

(例)「九九がわかる」ではなくて、
「2の段のかけ算を誤りなく暗唱できる」
のようにする。

行動目標は、そのまま「評価基準」として利用可能である

3.2.2 目標に準拠した評価の教育的意義

目標に準拠した評価の教育的な意義は、「指導と評価の一体化」をより具体的に実現可能にする点である。すなわち、個々の学習者について学習内容に対応した具体的な到達度のデータを客観的に得ることによって、発展的指導や補充指導など、個に応じた指導計画を立てることが可能になる。このことより、目標に準拠した評価は診断的評価・形成的評価として特に有効であることがわかる。

一方、学習者にとっては、目標に準拠した評価によって自分の学力形成に関する具体的な情報を学習内容との関連で得られるため、今後の自らの学習へ生かすことが可能となる。また、目標に準拠した評価が子どもの内発的動機づけや学習を促進することや、自己評価と組み合わせられた目標に準拠した評価がもともと意欲の低い子どもの内発的動機づけを特に高めることが示されている。

ただし、目標に準拠した評価は、知識や技能のように、より具体的で測定可能な教育目標に対しては有効であるが、思考や態度のように測定が困難で絶対的な到達点を定めることのできない学習目標（方向目標）に対しては適していない。目標に準拠した評価の適用範囲にはこのような限界があることも留意する必要がある。

目標に準拠した評価の客観性や信頼性を確かなものにするためには、到達目標を具体的に階層的に提示する評価基準の設定が必要である。その方法としては、B.S.ブルームたちの提唱した「タキソノミー（教育目標の分類学）」⁴⁾や評定尺度とその内容を記述する指標から構成される「ルーブリック（評価指標）」⁵⁾などが開発されている。

3.3 観点別学習状況評価

これからの教育では、「いかに社会が変化しようと、自分で課題をみつけ、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」の育成が重視されている（中教審の答申）。すなわち、自主的創造的な問題解決力の育成を目指している。したがって、これからの社会を生きる児童生徒にとって身に付ける必要がある学力は、知識・技能のみならず、学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを含む幅広い学力である。

このような学力がどの程度身に付いているかを的確に把握するため、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4つの観点から見た学習状況の評価（観点別学習状況の評価）を基本としている（観点数は教科によって異なっているものもあるが、観点別学習状況の評価の考え方は各教科共通である）。「観点別学習状況の評価」は、各教科の学習状況を分析的に評価するものであり、学習指導要領に示す目標に照らして、その実現状況を観点ごとにA、B、Cの3段階で評価するものである。「評定」は、観点別学習状況を基本として、各教科の学習状況を総括的に評価するものであり、小学校（第3学年以上）では3、2、1の3段階、中学校では5、4、3、2、1の5段階で評価する。従来は、「集団に準拠した評価（相対評価）」によっていたが、指導要録の改善により、評定についても「目標に準拠した評価」を行うこととなった（小学校・中学校）。

□1987年 中教審

学習指導要領改定の中で、「日常の学習指導の過程における評価については、知識理解面の評価に偏ることなく、児童生徒の興味・関心等の側面を一層重視し、学習意欲の向上に役立つようにするとともに、これを指導方法の改善に生かすようにする必要がある」と記されている。指導要録における各教科の評価について、「教育課程の基準の改善のねらいを達成することや各教科のねらいがより一層生かされるようにする観点から、教科の特性に応じた評価方法等を取り入れるなどの改善を行う必要がある」となっている。

□「関心・意欲・態度」

□「思考・判断」

□「技能・表現」

□「知識・理解」 (国語のみ5観点)

3.3.1 階層的学力観と並行的学力

ブルームの教育目標の階層的分類では、学力はもっとも簡単なもの（知識）からもっとも複雑なもの（応用）へと階層をなしており、知識と記憶し再生することなしに、理解し、応用し、分析し、総合し、評価することはできないと考えた。ここでは、理解から評価までが思考力の表れとみなされる。すなわち、思考力・判断力は、知識・技能の十分な習得が前提である。

- ▶ B.S.Bloom 「教育目標の分類学」
(Taxonomy of Education Objective)
- ① すでに学習したことを思い出し必要に応じて利用できる情報としての「知識」
 - ② 伝えられる情報の意味を捉えて利用できる力としての「理解」
 - ③ すでに学んだことを新しい課題場面や具体的状況に適用する力としての「応用」
 - ④ 問題を構成要素に分解・再構成し、問題全体的な構造を明らかにする力としての「分析」
 - ⑤ 部分をまとめて新しい全体を作り出す力としての「統合」
 - ⑥ 価値や意味を判断する力としての「評価」

- ▶ サンダース、「問題の分類学」
(Taxonomy of Questions)
- 認知領域 (cognitive domain)
 - 情意領域 (affective domain)
 - 精神運動領域 (psychomotor domain)

一方、「新しい学力観」では、知識・技能の十分な習得を基に階層構造を前提とせず、すなわち知識・技能を習得してから思考力や判断力を育む活動をさせるのではなく、互いに並行的に学ばせようとしており、教育目標の並行的羅列になりかねない問題があるとの批判もある。

また、関心・意欲・態度の評価はいくつかの困難さをもっている。その一つは、評価すべき対象が明確ではないということである。関心・意欲・態度を評価するということは、その前提として授業において子どもの関心や意欲を高めるための指導が行われなければならない。教師は、関心・意欲を喚起し、指導により持続させ、さらに拡大させる（または集中させる）ことができたのかどうかを把握する必要がある。そして、その結果を指導の改善に生かしていくことが重要となる。

観点別評価	
・これまで 「関心・意欲・態度」 「思考・判断」 「技能・表現」 「知識・理解」	・これから 「知識・理解」 「技能」 「思考・判断・表現」 「関心・意欲・態度」

4. まとめ

本稿は、学習評価の妥当性や信頼性を高めるため、評価の考え方を整理し目標に準拠した評価や観点別学習状況評価などの評価方法について、考察しまとめた。本研究が、今後の私立学校の学習指導において、「指導と評価に一体化」を推進するための資料として活用されることを願っている。

5. 脚注

- 1) 参考文献： 山路進、「新しい学力観に対応した学習指導と評価」、教職の充実のための実践講座、山路進編著、朝日出版（2011）
- 2) 生徒の、反応の正誤を知らせたり、励ましや注意を与えられれば、より適切に学習活動を行える。そのための教師の働きかけを KR (Knowledge of Result) と呼ぶ。
- 3) 正規分布 (せいきぶんぷ、英語: normal distribution) またはガウス分布 (Gaussian distribution) とは、平均値の付近に集積するようなデータの分布を表した連続的な変数に関する確率分布である。
- 4) 参考文献： Arnold.J.Linn; Measurement and Evaluation of Learning, Win.C.Brown Company publishers (1971) / 堀達陽訳『学習指導と評価』、平凡社(1975), p33-44
- 5) ルーブリック (rubric: 評価指標) とは、子どものパフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と、それぞれの尺度にみられるパフォーマンスの特徴を説明する記述語で構成される、評価基準の記述形式である。記述語の内実を具体的に示すため、作品例 (アンカー) が添付されることも多い。学力評価の方法のうち、客観テスト型の問題については正誤で採点できる。一方、自由記述式の筆記テストや、完成作品や実技・実演といったパフォーマンス課題による評価などでは成功の度合いに幅がある。したがって、ルーブリックは、客観テスト式の筆記テスト以外の評価法において、採点指針として用いられる。
(引用：現代教育方法事典)